書　　評

C・ワーグレイ著
「ラテン・アメリカの伝統」

(The Latin American Tradition)

佐野泰彦，M・クレスポ訳

新世界社，1971年，189頁

高　山　智　博

地域研究の調査には，様々なアプローチの仕方があるが，就中，コロンビア大学のラテン・アメリカ研究所長チャールス・ワーグレイの採用している文化人類学的方法は，全ての地域研究の基礎となる重要な作業といえよう。この意味で本書は，あらゆる分野のラテンアメリカ研究者に推薦できる本なのである。

ラテンアメリカと米国と対立する文化圏として指摘する著者の見解は正しい。このことを認識することが，ラテンアメリカの分析なり展望なりの前提として必要である。なぜならば，社会変化は，必ずしも政治学や経済学の理論通りに起るのではなく，その社会自体の文化のパターンによってかなり規制されて生ずるからである。ところで，ある文化の全構造体を一つのパターンとして抽出した最初の学者は，「菊と刀」で有名なルース・ベネディクトである。人の中核的性格は，幼年期の経験によって形成されるが，社会にはその社会独自の規制や慣習があり，人はそれに沿って育てられる。したがって同じ社会の成員は，多少とも同一の物の見方をし，同一の生活様式を身につけるものである。われわれが外国人の行為やその文化を評価する場合，自分が生れ育った日本文化の尺度によって判断する。しかしそれだけでは完全な理解は困難だろう。それはちょうどメートルで測るべき物を，一々，尺で測っているようなものだからである。

ワーグレイの研究目標は，ラテン・アメリカの文化のパターンを明らかにすることにある。彼

はそれを理想的パターンという名称で呼んでいるが，その理想的パターンとは，ある社会の成員が，家族は如何に組織されるべきかと考えるか，あるいは男性が父親としての役割において採るべき行動様式はどのようなものか，というようなことの全体なのである。著者が挙げているラテンアメリカの理想的パターンとは次のようなものである。

１６・１７世紀のイベリア半島を母胎とし，新世界の環境によって変貌した行動様式や制度。たとえば家族主義（ファミリズム），儀式上の擬制的血縁関係―― いわゆるコンパドラスゴー性道徳基準の二重性，社会階層の重視，肉体労働への蔑視，儀式的な礼儀作法の極端な尊重，聖人への崇敬，宗教上の派手好みなどである。

ワーグレイはこの理想的パターンが「急激な経済社会変動に対して，おどろくべき抵抗を示した」と記しているが，現在でもラテン・アメリカ人の日常生活は，この伝統的な文化のパターンによってかなり規制されている。同時に，このパターンは激動の時代を迎えて，変化しはじめたラテンアメリカの「基本線」を知るためにも必要である。

現在，ラテンアメリカにおいてみられる反米感情は，一般に，政治・経済的問題として解釈されるが，そればかりでなく，民族や文化の違いにまで及ぶものではないだろうか。

以上のように，ラテンアメリカは一つの文化圏として把握されるが，他方，諸国間の異質性にも注意すべきである。ラテン・アメリカには，ブラジルのような巨大国からエル・サルバドルやコスタリカのいった小国まで存在し，その自然環境，歴史的遺産，住民構成などには，かなりの違いがある。そして各国に固有のナショナリズムが存在する。それは米国に対する防衛的なナショナリズムであるばかりでなく，中米のエル・サルバドルやホンジュラスのように隣り合わせの小国にすらみられ，互いに対立し，「フットボール戦争」と呼ばれるものまで引き起しているのである。

この本の構成は，ラテン・アメリカを一つの文化圏として扱った１章及び２章，ラテン・アメリカの社会階層をサブカルチュアとしてとらえた３章，４章及び７章，それにラテン・アメリカの人種概念について述べた５章，親族関係のパターンをブラジルに例をとって説明した６章から成っている。

ラテン・アメリカは階級社会だということができる。そのような社会のサブカルチュアとして，ワーグレイは，部族原住民型，モダン・インディアン型，小農民型，旧精糖工場（エンジェニョ）・砂糖農場型，新式精糖工場・砂糖農場型，町型，都会上流階級型，都会中間階級型，都市労働者階級型の９個の型を挙げている。

これらのサブカルチュアの中で，今日のラテン・アメリカの動向を知る上で重要なものは，都会中間階級型だろう。この階級は伝統的な寡頭制に代って，政治・経済・文化の中核を担いつつある集団だからである。7章の「ラテン・アメリカ中間階級のディレンマ」はこのような中間階級の特徴を明確に捕えている。著者のいう中間階級とは，「第一に，かれらはホワイト・カラーの仕事についているが，それは最も利益のある仕事でなく，また権威のあるものでもない。かれらは小実業家であって，種々の専門職業者 ― 歯科医，薬剤師，あまり人気のない弁護士，医師，技師など ― である。何よりもまず，かれらは俸給労働者である。つまり会社の使用人であり，小学校や中学校の先生であり，公務員なのである」と規定する。すなわち中間階級の中でも，主に下層中間階級を指している。

この階級の人々は，伝統主義的かつ民族主義的だというのである。すなわち「上流階級 ― そして上層中間階級 ― は，国際的な趣好や習慣 ― フランスや米国の ― を身につけているけれども，この中間階級の構成員は，自らをラテン・アメリカ的な趣好や行動様式にとどめておこう」としている。そして「さまざまな伝統的価値観念を有しているが，と同時に，近代的な要求や抱負を兼ねそなえている。だが，かれらは依然として農村的・半封建的・人格的社会体系から，都市的・工業的・非人格的社会体系への過渡期にある社会に生きている」と位置づけする。

中間階級の人々は，下層階級に特徴的な肉体労働から解放されることを重視し，家や服装や礼儀作法において，自分たちよりも富裕な人とのギャップを無くそうと意識的に努めている。彼らの中でも，移住者や移住者の子孫が多い上層中間階級は，教育もあり，ビジョンも広く，国際的ではあるが，下層階級（メキシコなどではインディオであることが多い）との差を，故意に意識させようとする。それは自分たちが努力して築き上げた地位を守るために，下層階級との差を明確にする必要があるからかも知れない。ラテン・アメリカの中間階級の特徴とディレンマはこの点に存在する。すなわち彼らは「伝統主義者であり，自由民主主義者である。そして，機会の均等が，その国の全国民大衆にまで拡大されるべきだと信じている。かれらの子供達は，民族主義やすべての人の機会均等の理想を掲げて運動する大学生であるかもしれない。けれどもその国が，相対的に低開発経済を抱えているので，中間階級が維持したいと骨折る生活水準を全国の大衆に与えたならば，中間階級のひとびとの，比較的恵まれた地位もたぶん打ち砕かれてしまうだろう。かれらはそのディレンマにはっきりと気づいていないかも知れないが，それは暗々裏に存在する」のである。つまり「中間階級は，安定を保証する軍部のクーデターの前では受け身のままだし，急激な改革よりはむしろ安定の方に眼を向ける政党や党連を積極的に支持するのである。

結局ラテン・アメリカにおける中間階級の強力な発展が，民主制度を強化するに至るという保

証は全然ない」のである。しかし一方では，ラテン・アメリカ革命を目ざす過激派には，下層階級よりもむしろ，この中間階級出身の者が多いのも事実である。それは，中間階級の地位が経済的・社会的に不安定なのが原因だといわれている。ラテン・アメリカの一見，不可解な政治的展開には，多分にこの中間階級の矛盾した行動が反映しているのではないだろうか。

ラテン・アメリカの真の発達のためには，階級差，つまり貧富の差を解消することが不可欠である。しかし発展はしても，その差は一向に縮まらないのが現状である。特に大都市のスラム化は切実な問題となっている。たとえば，メキシコ市は年間７％という大変な人口増加率を示す７００万の大都市であるが，そこに４５２の貧困地区があり，２００万以上の貧民が住んでいる。その上，年々４０万の地方出身者がメキシコ市に流転し，貧民窟の住民と化している。オスカー・ルイスのいう「貧困の文化」の存在はメキシコばかりでなく，ラテン・アメリカ諸国の都市で同様であり，大きな問題を構成している。

著者はこの貧困階層のサブカルチュアについて殆ど何も触れていない。しかしラテン・アメリカの政治家や知識人自体がまだこの問題に眼を向けておらず，相変らず先進国の後を追いかけているのである。同じく本書には取扱われていないが，最近の現象として，高度技術社会の若者に共通の「若者の文化」と呼びうるサブカルチュア，すなわち旧世代の既成の概念では理解できそうもない，文化を持つ世代が，ラテン・アメリカでも，メキシコ市などでは出現していることを最後につけ加えておきたい。

「ラテンアメリカの伝統」という題名を持つ本書は，経済・社会変動に直面する伝統的な思考，行動様式の存続とその根強さに力点を置いている。だが，停滞，不均衡，貧困，依存というラテンアメリカの根本問題を解明するためには，その背景となる文化を知る必要があり，本書はそのための手ごろな入門書にもなろう。ただし，内容が一般的すぎることを指摘できるが，それは今後の研究を待つよりしかたがない。著者は本書に対して，「ラテン・アメリカ文化の中に普遍的な，あるいは，共通の分母を探求する試みによって，また地域的，内部的サブカルチュアを分類する試みによって，この本はさらに進んだラテンアメリカ研究のための恰好な基盤となるだろう」と期待しているが，その点は十分に叶えられているといえよう。